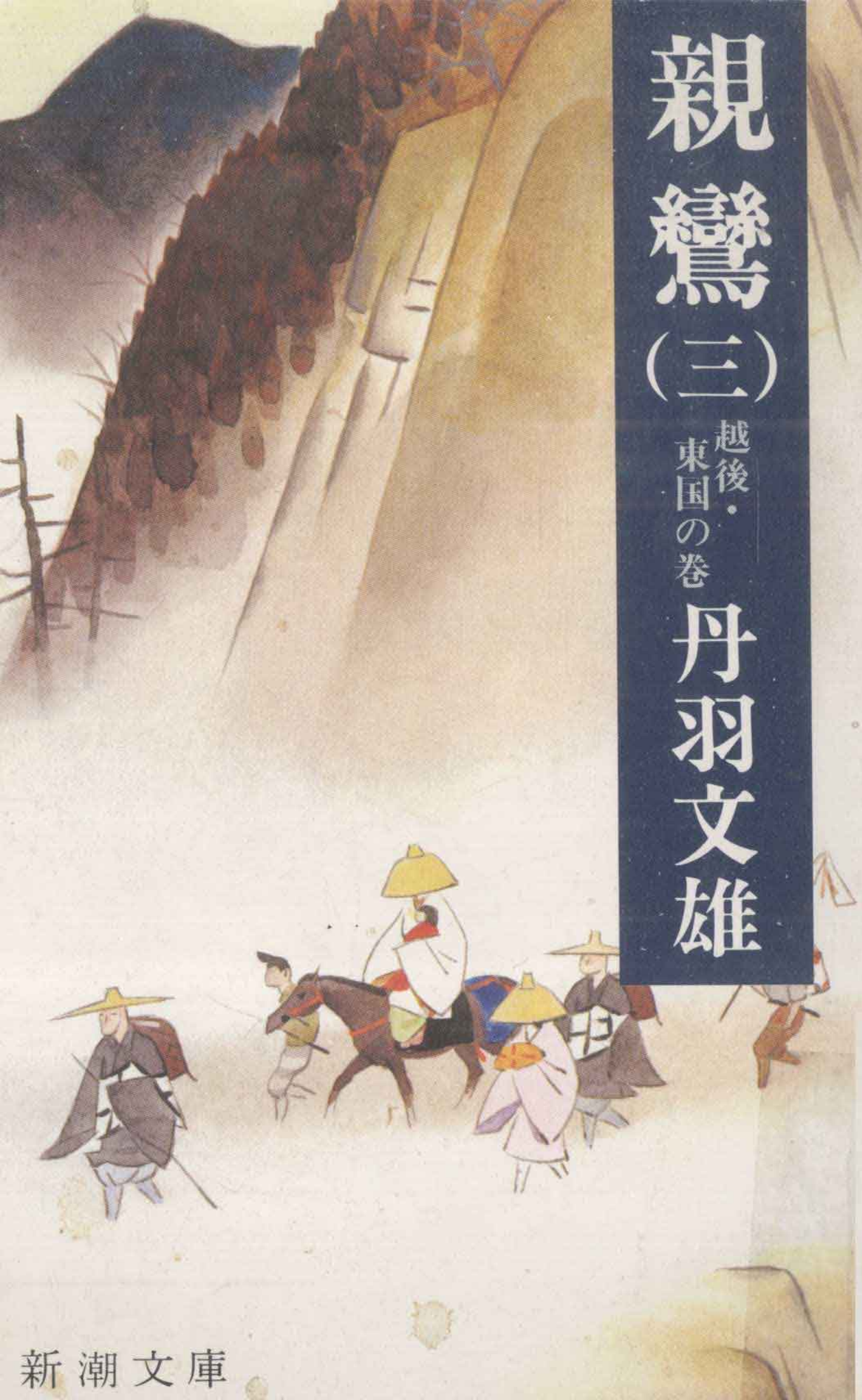
親鸞（三）

越後・東国の巻

丹羽文雄



新潮文庫

親鸞（三）越後・東国の巻

新潮文庫　に-1-16

昭和五十六年十月二十五日　発行
平成元年三月十五日　五刷

著者　丹羽文雄
発行者　佐藤亮一
発行所　株式会社　新潮社
郵便番号　一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話　業務部(〇三)二六六一五一一一
編集部(〇三)二六六一五四四〇
振替東京四一八〇八番
定価はカバーに表示してあります。

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛ご送付ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

印刷・錦明印刷株式会社　製本・錦明印刷株式会社
© Fumio Niwa 1981 Printed in Japan

ISBN4-10-101716-6 C0193

文庫

親鸞

（三）越後・東国の巻

丹羽文雄著

新潮社版

2766

目次

身辺雑事……七
明恵高弁……四五
夫婦の契り……六四
平家物語……八九
赦免……一〇四
法然歿後……一七一
東国行……一九二
稲田……二一八

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

教化の杖……二八八
慈円の予言……三〇四
泉……三三一
道元……三四二
三願転入……三八九
縁つきた地……四二七
帰京……四六九

親鸞

(三) 越後・東国の巻

身辺雑事

越後は、初夏であった。日本海も本来の海の色をとり戻したようであった。青空の見える日がつづいた。毎日空を仰いでいても、見あきなかった。その都度新鮮な感じをうけた。越後のひとびとは、一年の大半、空にいじめられていた。

親鸞の三善家通いは、十日目ごとにきめられていた。その前日、筑前は何となく落着かなかった。親鸞の来訪を待ちどおしいと思った。

「浄土宗とは、不思議な新興宗教だ。わかりやすい宗旨だと思ったが、じつに奥ふかいものだ。これまでいろいろと親鸞房からうけたまわっているのだが、きくたびに新しい感動をおぼえる」

三善為教が筑前にもらした。

「一回でも多くお話はきくべきものと思います」

「そうらしいね。京に出て学問をしていたころ、宗教に関心をもった。というより、宗教をある程度解しないかぎり学問は出来なかったからだ。しかし、その当時は知識として宗教を考えていたにすぎなかった。宗教がおのれにとって何よりも重大な問題だというふうには考えなかった。親鸞房は、うっかりすごしてきた己という人間をふと考えさせるきっかけをあたえて下さった。流刑までうけられた親鸞房だ。浄土宗の布教は、たんに浄土宗のためだけではないのだ。浄土宗

も、流刑も、ひとえに私たちのためだったのだ。そう考えるようになった」

三善家にも、念仏の声がきこえるようになった。はじめの内、親鸞があらわれると、念仏がきこえていたが、かえっていくと、きこえなくなった。それが度かさなるにつれて、親鸞のかえったあともなお念仏の声がきこえるようになった。あるとき、三善為教は部屋にひとりいて、自分の唱えている念仏にはっとしたことがあった。親鸞の法話を思い出していたのだった。念仏が三善家に住みついたようであった。いまでは、家族のものが念仏を唱えていても、あたりまえのようになった。筑前は念仏を唱えながら、親鸞を思っていた。

「明慶房はお弟子だが、親鸞房はお弟子という扱いをされない。私たちが下人（げにん）を扱う態度とはまるでちがう」

「明慶房は、師として親鸞房をあがめておられますが」

「いつかいっしょに来た覚善房に対しても、親鸞房は明慶房に対するとおなじ態度であった」

そのことを、あるとき、三善為教が親鸞に質問した。親鸞は微笑して、

「親鸞には、弟子というものはひとりもありません」

さわやかないい方であった。

「しかし、明慶房といい、覚善房といい、現に……？」

「私の手柄によって他人に念仏を唱えさせるようにしたのであれば、自分の弟子ともいえるでしょう。しかし、念仏は弥陀（みだ）の本願によってあたえられたものであります」

親鸞はつづけていった。

「弥陀からじきじきにあたえられた信心を、この親鸞がいかにも自分があたえたような顔をするわけにはまいりません。そのゆえ、私には弟子はひとりもありません。縁があって、たまたま明慶房も覚善房も、いっしょになって弥陀の本願にかなうように努めておりますが、師弟という関係を、自分勝手な都合できめるわけにはまいりません。明慶房も覚善房も、この私も、おなじ同行です。一介の同行にすぎません」

「しかし、親鸞房は法然上人にめぐり会われたことをふかく感謝されている。師としてあがめておいでになる……？」

「仏のご恩がわかるようになってから、私にはしみじみと師の恩徳がわかるようになりました」

この種の話にしても、三善為教には新しい考え方としてうけとれた。それはまた、新しい智慧となることであった。

「親鸞房には、十日目ごとに来てもらうことになっているが、筑前は十日間がながいように思っているらしいね」

兄が笑った。

「もっと度々おいでになるといいのですわ」

「しかし、竹の内草庵にも聴聞者があつまっているだろう。こちらにばかりお招きするわけにはいかない。筑前も、聴聞者となって、こちらから出かけたらどうだ」

「許して下さるなら、草庵に通いたいと思います」

「ひとり歩きは出来ないが、だれかをつれていけばよいだろう」

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

兄に心の中を見抜かれているのは、恥ずかしかった。が、外出が許されたことは大きなよろこびであった。筑前は草庵を訪ねるときの衣裳のことなどを思った。

市女笠の女が、下人と女童をつれて竹の内草庵にあらわれたとき、お種はきょとんとして女客をみつめた。

「筑前です。親鸞房におとりつぎ願います」

女客がいった。そのひとが三善家の当主の妹であると気がついたのは、しばらく経ってからであった。お種がかけこむように中にはいった。

明慶があらわれた。

筑前は、庵の中にはいった。女童と下人は、外で待つことになった。庵には、二人の聴聞者がいたが、筑前が来たことを知ると、逃げるように出ていった。

「悪いことをいたしました」

筑前は早々にかえっていく聴聞者を気の毒がった。

「三善家の方ときいただけで、おそれて、逃げていきました」

親鸞も笑った。

「兄から許可をうけて、お訪ねしてよいことになりました」

「おいでになることを心待ちにしていました」

目鼻立ちのはっきりした顔を、親鸞は見つめた。

明慶とお種は、別の部屋にしりぞいた。覚善はいなかった。いろりは、火種をたやさない程度

に燃えていた。

「たびたびお目にかかっていながら、私自身にとって重大なことをお話していなかったので、それが気になってしようがなかったのです」

親鸞がいった。

「何でしょうか」

筑前は顔をあげて、親鸞をみつめた。ひろい額は、いかにも聡明そうであった。筑前はまるで男のように親鸞と向きあっていた。大柄であった。雪国のひとらしく、肌がきれいであった。

「私の心の中をよみとおしていられたあなたには、是非このことも知ってもらいたいと思いました。じつは、私は京におりましたころ、妻をもっておりました」

「奥さまがおありだったのですか」

すこし意外だったようである。

「私としましては、十分考えたすえに、妻をめとったのです。私は妻をかくし女のようには扱いませんでした」

筑前がうなずいて、微笑した。

「男の子があります」

「京におのこりになったのですか」

親鸞が目を伏せて、しばらくだまっていた。

「おどろかれたでしょう」

顔をあげた。
「いいえ」
微笑する。
「最初のときにお話しようと思ったのですが」
「大原(おおはら)あたりの妻帯の僧侶(そうりょ)の方を知らないわけではありません。かげに女性がいるという、えらいお方のお話もいろいろと聞いておりましたので、あなたの妻帯をそれほど意外とは思いません」
そういってから筑前は、親鸞がそのことをたれにも話さず、自分にだけ告白したのは何故(なぜ)かと思った。
「妻子のあることは、お種どのには話しました。お種どのはこの家で働いていてくれます」
「あの女の方ですね」
「親鸞は罪ふかい人間です」
息をとめるようにして、筑前はしばらくだまっていた。
「その妻は亡くなりました」
筑前の顔にある表情が走った。
「こちらにあなたがおいでになってからですか」
「いいえ、私の罪科が決定したことが、大きな打撃となりました。産後で、からだが弱っていたところへ、私が流刑となりましたので、妻はたえきれなかったのです」
「それで、お子さまは？」

「幸い、妻の兄夫婦が育てていてくれます。子供のことよりも、妻のことが思い出されます」
「お気の毒に……」
と、筑前はあとのことばをのみこんだ。筑前は、別な角度から親鸞を見ることになった。
「よくよく煩悩具足の人間です。私の日々は、罪の自覚と、罪との対決でございます。その罪の根は、臨終のときまで断ちきれそうにありません」
「吉水の禅室にも、そういう方はおいでになったときいておりました」
「私の流刑は、そういうことも大きな原因であったと思っております」
「法然上人は、もちろんご存じだったのでしょう？」
「しかし、上人は、そのことについては何も仰せになりませんでした」
「あなたはよくよくお考えになったすえに、奥さまをおもらいになったのですもの、まちがっていたとは思いません」
「しかし、あなたの家族の方は、意外に思われるでしょう」
親鸞は苦笑した。
「女をつれた念仏聖も、ときには門にあらわれます。それに兄は京にしばらくいましたから、妻帯している高野聖をいく人も見かけています。決しておどろきません。私も、そういうことは見慣れているつもりですもの」
「おさげすみにはならないのですか」
筑前が、首をふった。小娘のような否定の仕方であった。親鸞はまた苦笑した。

「私の心の中をよみとおしていられたあなたも、私が妻帯していようとはお思いにならなかったでしょう」

「僧の妻帯は重大なことでしょうけど、私はそれほどおどろきません。兄といっしょに今日までいろいろとお話をうけたまわってまいりましたけど、そのお話とあなたの告白がそれほど思いがけないとは考えられません。だってあなたは、念仏を一般のひとにおすすめになっています。一般の人間は、男と女の結びつきによって出来ているのですもの。そういう人間のことばかりお考えになっているのですから……」

筑前の心に、ふと衝動が起った。それは、確信といってよいものであった。

「やっといまになってわかりました。あなたのお話が、ほかの僧の方とどこかがちがうと感じていたのですけど、それはいつも親鸞房が話の中心に置かれているせいとわかりました。あなたはひとのことを話していられるのでなく、いつもご自分をさばいていられるのです。ご自分の弱さ、愚かしさということを問題にしていられるのです。そして、それをこの現実の生活の中で、何とかしようとしていられるのですわ。あなたは極楽や地獄の話をなさらない。あなたにとっては、あの世のことは問題でなく、この罪多い現実生活が、そのまま絶対的な意義をもっているのです。生意気なことを申し上げましたけど」

筑前は気をたかぶらせていた。

筑前が女童や下人をつれて帰っていったあと、親鸞はいろりのそばで目をとじて坐っていた。親鸞はしきりと自分と闘っているようであった。妻子のことを告白したので、ほっとしていた。

筑前に対して、これかららくな気持で向えるのだ。筑前は、親鸞の妻帯にこだわらなかった。むしろ自然のこととしてみとめてくれた。そのことがすこし意外でもあったが、親鸞自身がこだわっていたほど、第三者は重大に考えていないことがわかった。

「妻帯の経験がおありなので、これからはもっとらくな気持でお話が出来ます」

筑前は、そういった。

「一生不犯を標榜して、きびしく戒律を守っていられる方に接しますと、何となくこちらが息苦しくなって来ます。おなじ人間という気持になれないせいですかしら」

そうもいった。

「お話をきいておりますと、浄土宗は親鸞房のためにあるような気さえいたします」

親鸞は、筑前の理解力の鋭さをみとめる。京の橋の上で、いきなり話しかけて来たが、尋常な女性でないことは、そのときからわかっていたのだ。吉水へ聴聞に通う自分の心の動きを、筑前は見抜いていた。

「あんまり学問がおありなので、このあたりの男では釣合いがとれません。そのためいまだに結婚もされないでいるのです」

お種が話したことがあった。親鸞は筑前と話をしていると張合いがあった。筑前には、打てばひびくようなところがあった。

いつか再会を親鸞は期待していた。それが奇蹟のように実現された。その上、筑前が庵室にまで出向いてくるようになった。三善家で筑前に会っているときよりも、竹の内の庵室で向きあっ

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com